

第 3 会場

Ⅲ-1 1920年代の話しことば教育

聖徳大学短期大学 有 働 玲 子

昭和5年9月、飯田恒作は、「話し方教育は、本質的な価値を中心にして、話すことをもっと一般化しなければならないと思ふ。今後の研究はさうした方面に発展しなければならない」（『国語教育』一話方号一、47ページ）と指摘している。

一連の発表にて、既にその本質的な価値を中心とする話しことば教育の実践の存在を明らかにしてきた（第77、78、80回大会）。

そこで、本発表では大正末期から昭和初期の時代において、次の二点について考察を試みることにしたい。

1. 話しことば教育の実践はどのような広がりをもっていたのか。
2. 自己表現としての話しことば教育はどのように指導されていたのか。

Ⅲ-2 「話し合い」学習の成立・展開についての考察

福井大学 牧 戸 章

人は関係的な間主観的存在であるために、ある対象を認識する場合、その認識する主体間に思想を伝え合い、交流し合うという関係が生じる。ある認識対象をめぐる、認識主体間に思想の交流が成立するわけである。その交流の中心をなすのが「話し合い」である。したがって「話し合い」という学習活動は、あらゆる教科の授業のさまざまな場面において不可欠なものとなっている。

しかし、「話し合い」の必要性や価値が理解されている一方で、「話し合い」学習が確実に形成され、積み上げられてきているとは言い難いと考えられる。

本発表では、「話し合い」学習に関わる先行研究を概観し、その成果を明らかにするとともに、具体的な学習場面の考察・検討から、「話し合い」学習の成立・展開のための有効な指標を探究してみたい。

Ⅲ-3 国語科話しことば教育についての研究

—大橋富貴子氏の話しことば教育理論・実践を中心に—

お茶の水女子大学附属小学校 相 原 貴 史

大橋富貴子氏は、1938(S13)年以來、約半世紀にもわたって小学校教育にたずさわるとともに、現在もその後継者の指導にあたっている。その間、大橋富貴子氏が執筆された論文・実践記録は、管見におよんだだけでも479編を数える。それらを中心的な課題に視点をあてると、現時点で4期に類別することができる。

今回は、それらのうち第1期（1938～1952年）の論文69編を中心に、大橋富貴子氏の「児童観」と、それをふまえた「話しことばの教育の意義論」について考察したい。